

SHOW HEY シネマールーム

★★★

アンダードッグ (前編)

2020年/日本映画

配給：東映ビデオ/前編 131分、後編 145分

2020 (令和2) 年 12 月 1 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：武正晴

原作・脚本：足立紳

出演：森山未來/北村匠海/勝地涼

／瀧内公美/熊谷真実/水

川あさみ/富手麻妙/萩原

みのり/新津ちせ/友近/

秋山菜津子/芦川誠/二ノ

宮隆太郎/上杉柊平/清水

伸/坂田聡/徳井優/佐藤

修/山本博(ロバート)/松

浦慎一郎/竹原慎二/風間

杜夫/柄本明

👁️👁️ みどころ

亜流のボクシング映画(?)『百円の恋』(14年)を大ヒットさせた製作陣が、二匹目のドジョウを狙って本格的ボクシング映画に挑戦! そのテーマは“アンダードッグ”(かませ犬)だが、まずはその意味を理解し、今風に言えば、墮ちるところまで墮ちた主人公にしっかり寄り添いたい。

女芸人、しずちゃんこと山崎静代を参考に(?)、お笑い芸人ボクサーを3人目の主人公としたため、配信版は全8話、総尺350分超に、劇場版は前編131分、後編145分、総尺276分の長尺に! そのことの是非は?

前編のクライマックスは、本格的ボクサーvs お笑い芸人ボクサーの4回戦エキシビジョンマッチ。本来その勝敗は明白だが、高視聴率目当てのパラエティー番組では・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「ボクシング映画」にはずれなし! のはずだが・・・■□■

ボクシング映画の最高峰はもちろん『ロッキー』シリーズ(76~06年)(とそれに続く『クリード』シリーズ(15年~18年)『シネマ37』27頁、『シネマ43』81頁)だが、その前後にはマーティン・スコセッシ監督の『レイジング・ブル』(80年)や、クリント・イーストウッド監督の『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)『シネマ8』212頁)等の名作がある。日本でも、古くは石原裕次郎主演の『嵐を呼ぶ男』があり、新しくは『あしたのジョー』(11年)『シネマ26』208頁)や『あゝ、荒野(前・後篇)』(17年)『シネマ41』50頁)等がある。

「潜水艦モノは面白い」と同じように、「ボクシングものにはずれなし」が私の持論だ。亜流のボクシング映画だった(?)『百円の恋』(14年)も、安藤サクラという名女優のおかげで素晴らしいボクシング映画になっていた(『シネマ35』186頁)。ネタが少ない邦画

界では、柳の下の二匹目のドジョウが狙われるから、数々の賞を総なめにした『百円の恋』のプロデューサーがその時の製作チームを再結成し、新しいボクシング映画に挑んだのが本作だ。その企画に乗ってきた ABEMA と東映ビデオが力を合わせて、一方では全8話、総尺350分超の配信版を作り、他方では前・後編に分けた劇場版を作るというプロジェクトが動き始めることに。そのプロジェクトのキーワードは、“アンダードッグ”。これは、「将来有望なボクサーの踏み台となるような“かませ犬”的ボクサーのこと」だ。なるほど、なるほど。

本作前・後編を通した主人公・末永晃（森山未來）は、私たち団塊世代が少年時代に、『週刊少年マガジン』でむさぼり読んだボクシング漫画『あしたのジョー』とは全く異質のキャラだが、なぜ彼はアンダードッグに？劇場版でも前編131分、後編145分、合計276分の長尺になっている本作は、まずそこから・・・。

■妻は家出！父親と同居！そんな“かませ犬”の仕事は？■

“格差”の広がりがか叫ばれ続けている昨今の世の中では、勝ち組 vs 負け組の差が顕著。負け組をより軽蔑し、蔑視の意味を込めた呼び名が“負け犬”だが、末永晃はまだ“負け犬”ではない。それが本作の大前提だ。すなわち、晃はたしかにボクサーとして最初で最後の大舞台だった7年前の日本タイトルマッチで敗れたものの、今も場末のボクシングジムで“アンダードッグ”をしているから、決して負け犬ではなく現役ボクサーだ。

もっとも、いつまでもボクシングの夢をあきらめきれないまま自堕落な生活を送る夫の晃に愛想をつかした妻の佳子（水川あさみ）は、息子の太郎（市川陽夏）を連れて家出。晃は借金まみれになっている、飲んだくれの父・作郎（柄本明）と汚いアパートでの2人暮らし。そんな晃のアルバイトは、木田五郎（二宮隆太郎）が経営する場末のデリヘル店で、デリヘル嬢を送迎する車の運転手ときたから、その没落ぶりは明白だ。強い吃音を持つ木田と晃との腐れ縁も前・後編を通して徐々に明らかにされるが、そこで働いているのはベテランの現役デリヘル嬢の新田兼子（熊谷夏実）だけだった。それは、その世界の上部で勢力を広げているヤクザ組織の中で木田がすでに負け犬になっていたためだ。

しかし、今日は幼い娘・美紅（新津ちせ）を連れてシングルマザーであるとはいえ、どこかに陰りを帯びた魅力を持つ女・明美（瀧内公美）が入店してきたからラッキー。そう思っていると、母親・田淵真由美（秋山菜津子）と暮らす車の男・田淵玄（上杉柊平）に明美がいたく気に入られたから、明美にとっても店にとってもさらにラッキー。それは、陰りを帯びた明美の魅力によるものだったが、同時に性的不能者・田淵の欲望を満たすための明美のサービスが如何なるものでもOKという、デリヘル嬢としての明美の献身的なお仕事ぶりによるものだった。しかし、そうかといって、送迎係の晃が田淵の豪邸の中に勝手に入り込み、コトに及ぶ2人の姿を覗き見するのは如何なもの……。そりゃそうだが、それも2人の秘めゴトの中では刺激になっていたそうだから、アレレ……。そんな晃のアルバイトはまさに最低！

■大村龍太との出会いは不自然！編集に違和感あり！■

前編の導入部はそんな晃の“自己紹介”から始まるが、その設定には十分納得できる。『あ

したのジョー』の主人公たちには「少年院」がお似合いだったが、『北のカナリアたち』(12年)、『シネマ 30』222頁)や『怒り』(16年)、『シネマ 38』62頁)で観たように、芸達者でどんな役でもOKの森山未來なら、こんな設定、こんなキャラの晃役もピッタリ！また、『彼女の人生は間違いじゃない』(17年)、『シネマ 40』272頁)や『火口のふたり』(19年)、『シネマ 45』219頁)で、デリヘル嬢や大胆なセックスシーンがすっかりおなじみになった演技派女優・瀧内公美にも、少し暗すぎる感もあるが、本作の明美役はピッタリ！

そう思っていたが、その次に登場する3人の主人公のうちの1人となる男・大村龍太(北村匠海)と晃との出会いのシーケンスはいかに不自然だ。デリヘル嬢の送迎というアルバイトとは別にアンダードッグという本業を持つ夜行性の晃は、夜な夜な1人でサンドバッグを叩いていたが、ある日いきなりそこに入ってきたのが、腕にタトゥーを入れた青年・大村龍太(北村匠海)。今ドキの陽気な若者風(?)の彼は、今や日常的に口が重くなっている晃に対して、プロテストのためにボクシングのトレーニングに励んでいることや、7年前の日本タイトルマッチでの晃の試合を見たことを話してさっと帰っていったが、これって一体ナニ？彼はその後も時々ぶらりと晃のジムを訪れ、一方的にさまざまなおしゃべりをしていくが、その中で妻・大村加奈(萩原みのり)の作る手料理を食べに来いよ。とまで誘うのは更に不自然。これって一体ナニ？

これは、後編ラストのクライマックスでの、晃と龍太のボクシング対決に持っていくために、前編と後編の要所要所に入れている伏線だ。この伏線は全8話、総尺350分の配信版では多分第2話か第3話のメインストーリーになるものだが、前・後編276分の劇場版では、それが本作のように編集されているわけだ。しかし、私にはこの編集は違和感あり！

■□■ 3人目のボクサーはお笑い芸人！この設定はいやはや！ ■□■

11月29日に発表された、ホワイトハウスでの定例記者会見で政権の公式見解を伝える大統領報道官ら7人の広報チームのメンバーは全員女性だったから、そのことに全世界はビックリ！日本ではそんな要職はもちろん、女性のお笑い芸人も少ない。その中の1人である友近は武正晴監督の『嘘八百』(18年)、『シネマ 41』72頁)で起用されていたが、女お笑い芸人の1人、しずちゃんこと山崎静代が2009年にボクシングC級ライセンス(ヘビー級)を取得し、取得前の2007年から、体力的な理由で引退した2015年まで続けた女子アマチュアボクシング界で数々の輝かしい成績を残したのは、素晴らしい現実だ。そんな背景を原案にうまく取り入れて(?)脚本を書いた足立紳は、3人のボクサーを主人公とする本作の3人目のボクサーを、お笑い芸人の宮木瞬(勝地涼)と設定した。『亡国のイージス』(05年)、『シネマ 8』352頁)で日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞した勝地涼は、大先輩・真田広之の向こうを張って、堂々たる気骨漢ぶりを見せていたが、さて本作のお笑い芸人役は？

私が近時TVの民放番組をトンと見なくなったのは、アホバカバラエティ的要素をますます強めているほか、その出演者が吉本系を始めとするお笑い芸人ばかりであること。こりゃ観ているだけ時間のムダだし、観ているだけ自分がバカになるばかり。そう思わざ

るを得ないからだ。しかし、そんな中でもしずちゃんが、お笑い芸人活動と並行しながら本格的にアマチュア女子選手としての練習を始め、前述のライセンスを取得し、数々の本格的な公式戦で戦う姿には注目していた。また、合格した後に新聞などで時々報道される彼女の試合にも注目していた。彼女がC級ライセンスを取得するまでのプロセスを伝えるバラエティー番組が半分ヤラセであることはわかっているが、それでも半分は真剣。C級ライセンスに挑戦しようとした時のしずちゃんの気持ちは？そしてまた、それに合格した後、女子アマチュアボクシングの選手として生きる決心をしたしずちゃんの気持ちは？

私はそれを考えながら本作のスクリーン上で次々とお笑い芸人の本領を発揮している宮木の姿を見ていたが、これはどう見てもバラエティー色やおチャラケ色が強すぎるのでは？お笑い芸人の宮木がボクシングのプロテストを受けようという動機は一体ナニ？そしてまた、その決意の強さは？その努力は？

■□■宮木の対戦相手は？そのTV放映は？視聴率アップは？■□■

しずちゃんと同じように、宮木がボクサーのプロテストに合格できたのはめでたい限りだが、その資格を生かして視聴率を取れる番組を作るためには、何よりも話題性のある対戦相手の選出が重要。そこで、達者な俳優・宮木幸三郎（風間杜夫）を父に持ち、“親の七光り”と揶揄されている中途半端なお笑い芸人・宮木のバラエティー番組として企画されたのが、晃との4ラウンドのエキシビジョンマッチだ。

もちろん、プロテストに合格したばかりの宮木と、7年前とはいえ日本タイトルマッチの挑戦者だった晃とでは、格段の実力差があるのは当然。まともに打ち合えば試合にならないことは最初から分かっていたが、ジムの経営に苦しんでいる会長が、「所詮エキシビジョンマッチだ。これで多額のカネをもらって、キッパリ引退すれば、お前の第2の人生が開ける」と晃を説得したところ、晃はあっさりOKしたからアレレ……。これは、2人ともそれまで天職にしてきたボクシングとまともに向き合うことを放棄し、「カネのためやむなし」と決めつけてしまったためだ。それはそれで仕方ないとしても、その後、番組のプロデューサーから「2ラウンドあたりで一度宮木のパンチを受けてノックダウンしてくれれば嬉しいのだが……。もちろん、その後は宮木をボロボロにやっつけてくれてもいいよ」と、八百長まがいの提案（指示？）まで受けると……。

さあ、前編はここから晃VS宮木の4回戦エキシビジョンマッチのクライマックスに向かっていくが、番組制作者はもちろん、世間も晃が勝者になるという結末はミエミエ。問題は、如何に観客の注目を集め、感動させる演出（ヤラセ？八百長？）をするかだが、たった1人、宮木の恋人・山崎愛（富田麻紗）だけは、この試合に賭ける宮木の不退転の思いを感じ取っていたらしい。試合に向けて日に日に宮木の真剣さは強まり、実力的にも相当アップ！ひょっとして、これなら……。？そんな期待の中で迎える感動的な前編のハイライトは、あなた自身の目でしっかりと！

2020（令和2）年12月7日記